佳作

愛おしい命

広島県 広島県立呉三津田高等学校一年 門前地洋

僕は生き物が好きだ。生き物好きが高じて様々な個体を飼育している。ちょうど一年前の夏のある日、ガラスの飼育ケージをふと見やると、「ドサツ」という大きな音とともに「住人」であるクレステッドゲッコーが、壁面上部から落下して脳震とうのような症状を起こし、身長二十センチ程の小さなからだを小刻みに震わせ、けいれんをしていた。

鳴き声を発することができない為、口を開けたまま、ピクピクとからだを動かしているその様子を見て、命に関わる異常な状態であることが分かった。

土曜日の午後であったが、診察をしてくれる動物病院を探し、苦しむゲッコーを運搬用のキャリーケースに移して母の運転する車で急いで病院に向かった。

途中、無事を確かめる為、何度もケースのふたを開け、「大丈夫?」

「もうすぐ病院だからね。」

と声をかけた。分かっているのか、ゲッコーはケースの片隅にうずくまり、開いていた口を閉じ、じっとしていた。やがて病院に到着し、受付を済ませ、問診票に基本

卵が排出されないことで、食欲が低下し、同時に体力も落ちていきます。開腹して卵を取り出す治療法もありますが、今のままでは手術に耐えられるとは言い難いです。

と告げた。「死んでしまう…。」。背筋を冷たいものが伝うような感覚に陥った。「どうすればよいのですか」と問う前に、

「卵を抱えていると不足しがちになるカルシウム剤を十日に一度注射して様子を見ましょう。お家でもエサと一緒にカルシウム剤を毎日与えて下さい。まずは体重を増やし、体力を回復させてあげましょう。」

と、先生が治療方針を打ち出してくれた。十日に一度、病院で注射してもらい、毎日水で溶いたカルシウム剤を与えなければ命が危ない。ゲッコーの運命は僕が守る。そう決めて病院を後にした。それから、長い闘いが始まった。定期的に診察を受けながら、家でも毎日決まった時間にカルシウム剤を少しずつ口に含ませてやり、自らエサを食べられない程衰弱していた為、爪楊枝にゼリーや水で溶いたパウダーフードを付けて、「頑張ろうね」と声を掛けながら与え続けた。もともと樹上性のヤモリである為、高さのあるケージ内で壁から壁に飛び移る、活発な様子を見せてくれていたが、そんな状態に戻るまでは、まだまだ時間がかかりそうだ。半年程経ったある日の診察で、

「体重も増えてきたのでカルシウム投与は止めて、お家で様子を見てあげて下さい。気になる様子が現れたら、

情報や症状などを記入し、不安な気持ちのまま待合室でケージをひぎの上に乗せ静かに診察の時を待った。どのくらい待っただろうかと、とても長い時間が過ぎたように感じられた。ようやく名前を呼ばれたが、コロナ感染予防の為診察室には、ペットの様子を一番良く知っている一人しか入ることができなかった。獣医師に上手く状況を説明できるかどうか自信が無かったが、毎日世話をしているのは僕なので、意を決してゲッコーとともに診察室に入った。頭の中を整理し、僕なりに一生懸命に事態と症状を説明した。優しい顔をした女性の先生は、ケージからそっとゲッコーを取り出し、真剣なまなざしで、色々な角度から状態を確認してくれた。

「血液検査とエコーを使って内部の様子を見てみましょう。お預かりしますので、診察室の外で待っていて下さいね。」

とのことだったので、僕は、

「お願いします。」

と頭を下げて、母の待つ待合室に出た。待合室には他にも患者の家族がいて、皆心配そうに連れて来た動物を入れたケージを大事に抱えていた。そうなのだ。一般的には「ペット」と一括りにされるけれど、ここに集う動物達は「飼い主」と「ペット」ではなく、固い絆で結ばれた「家族」なのだと思います。知らされる光景だった。やがて再び名前を呼ばれ、僕は診察室に入った。先生はエコーの写真を見せながら、

「この子は女の子で、お腹の中に無精卵を抱えています。

連れて来てあげて下さいね。」

と言われ、治療の目的が立った。小さな体のお腹にメスを入れる決断はできなかったが、あれ程衰弱していたゲッコーが、生きていてくれることがただただ嬉しかった。飼っている生き物の生命に責任を持つというのは大変なことだ。どれ程大切に世話をしても、別れの日は必ずやって来る。でも今回は、医師に生命の危機を告げられても、一日でも生き永らえて欲しい一心で語り掛け、世話を続け、ゲッコーも、そんな僕の愛情に、小さな体で精一杯応えてくれたと思う。

「タン!」。初めて病院に連れて行ってから一年が経ったこの夏、軽快な音を響かせて、ついにゲッコーは壁面から壁面へ、飛び移ることができるようになった。トカゲやヤモリなどの爬虫類には喜怒哀楽の感情は無いと言われるが、決してそのようなことは無く、嬉しそうなそれでいて誇らしそうな表情は、僕にしか伝わらないものかもしれないが、今まで感じたことがないほどの大きな感動を、僕にもたらしてくれた。カエルやトカゲなど、他にも飼育している生き物達がいるが、彼らが授かった生命を、責任を持って全うさせてやらなければならぬ使命が僕にはある。愛情と敬意を持って接する限り、彼らは応えてくれると信じている。いずれ、その愛おしい生命を救うことのできる職業、獣医師になるのが僕の夢だ。